# イコール・コンディションを楽しむ

ラグビー競技の根底に equal condition という思想があります。

IRB 制定のラグビー憲章には、Equal 0pportunity to Participate と狭い意味で使われていますが、平等、公平を唱うラグビーを楽しむための基本的思想です。

ベターラグビー初版の愛好少年 2 人の写真が、改定版では 4 人即ち 4 体型に改められたのは、全ての人にとってラグビーが楽しいものであることを示しています。

双方が同人数で戦うことは当然としても、セットプレーのボールの取り合いは同人数で中心線に対し対照的位置の確保がなされています。野球のように攻防固定交替性でなく常に攻防に平等の機会があたえられているというのも equal conditionの一つです。

ボール一つあればどこででもでも簡単にできるスポーツです。equal conditionでスタートするのですから敵という言葉なじみません。スポーツも戦争も敵・相手と「戦う」ということでは共通していますが、戦争には「楽しむ」という営みは本来的に絶無であり、スポーツでは敵に対する憎しみは許容されないものです。争覇の戦争 war 状態の中での一つ一つの戦闘 battle が戦況を左右します。戦争に置ける敵は enemy で生存を脅かし、危害を加えるものであるのに対し、スポーツの場合は opponent 対抗する者で、その競技成立のための協同者です。戦争は勝者のみ残ることができて、敗者は死か服従かです。戦争を始めるにあたっては、その理由付けがなされ、正義であることを呼称しますが、人類の歴史は生存競争以外に正しい戦争は無いことを証明しています。戦争は敵に勝る戦力と策略をもって敵を屈服させる無法状態での生存競争です。赤十字や宗教上の拘束を設けても平易に無視され、核兵器や生物兵器が使用され人類破滅への道をたどっています。勝つためには何でもするという思想がまかり通っています。

戦争と違って equal condition は競技を楽しむための基盤で楽しむ方法の根幹です。ですから勝つためには何をしてもよいというのではありません。スポーツでは戦いの後に両方が no side の状態で平等に残ります。その基盤の元に、双方が平等公平で、アマチュア amateur 主義即ち暇と金があるものが楽しみにするものという原点です。

トーナメント方式は、楽しむために勝ち残ることに興味が延長され優勝者を決めて励みとする形式として考えだされましたが、100 チームの内 99 チームまけるのです。競技に勝ち残ることが、宿命である勝ち残りと勝利至上主義心が混在してしまっているのが現状です。スポーツは humanism をもとに規則を設けて戦うこと勝敗を楽しみます。相手をだまして優位に立つケースも、プレーとしてのダミーやトリックはダミープレーそのものが楽しみの内容として許容されことは、自由と平等公平の精神に反するものではありません。

ラグビーの equal condition について復習しましょう。まず初めにラグビーの根本理念を物語る発祥の出来事は fare であることを象徴する競技の原点、プレーヤーたちの自由思想と公平感覚が一つの競技を導きだしたのです。競技外の平常にはノーサイドで、両サイドに分かれて戦う試合をニュートラルなレフリーが公平に進めるわけです。

戦うルールは一貫して双方平等公平であることを保証しています。双方同人数で戦う申し合わせがなされ、グランドの広さに適合する 15 人がもっとも適当ということになりました。同人数でスタートし負傷者がでても補充しないルールのもとで、負傷者があれば補充を認めたり、試合中断して日をあらため同人数でやり直すこともそんなに抵抗がなかったようです。

スクラムの第一列 3 人という以外配置は基本的に自由ですが、危険防止とスムースな球出しのために規制がくわえられています。ラインアウトも、ボールの線を中心にオフサイドラインを挟んで対称的になるように考えられています。ボールを入れる側の投入するプレーヤーがボールの位置に居るのですから相手側もボールの線待て前に位置できるというものです。

時間の平等、陣地の平等から攻防チャンスの平等まで、公平であることが保証されています。攻防機会は双方同等です。攻防変転時の力の差とやりとりが一つの面白さで、ルールは継続するようにつくられています。イコール・コンディションでの勝敗の分かれ目は、展開局面での人数の不平等による展開力の差が得点差になるのです。ボールを持ったプレーヤーと捕まえる相手との当り加減の優劣が影響がないとはいえませんが、問題は展開へのボール処理であって人間の当りそのものによる優位だけを課題にすることは競技本来の理念からはなれるものです。

2006.09.19

西川　義行